
RITA

ジングル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R I T A

【Nコード】

N 2 0 2 1 V

【作者名】

ジングル

【あらすじ】

王都で起こった、とある殺人事件。それは、手練の魔剣使いだけを狙った犯行で、すでに4人の魔剣使いの命と、4本の魔剣が奪われていた。その犯人を追うリタは、魔剣の痕跡が見つかったという街へと向かうのだが……。※「意志を継ぐ人々」以前に書いた未完作品です。

魔剣と殺人（前書き）

かなり以前に書いた未完作品です。結末は既に決まっているのですが、果たしてどうなることやら……。。

魔剣と殺人

雨振る路地裏を急ぎ足で駆ける影があった。

人数は4人。

どれもこれも真っ黒なローブを身に纏い、夜闇に溶け込もうとしているようであった。雨水の上を駆ける足音も、ブーツに仕込まれた特殊な魔術のせいで周囲には届かない。

やがてそれらの黒い影は物音一つさせず、路地裏にある一軒の古い建物の前にたどり着いた。ほかの建造物となんら変わらない、石と木とで組み上げられた昔ながらの屋敷。

4人のうちの一人が、全長30センチ程の槍のようなもの・・・先端に魔力との親和性の高い金属を埋め込んだ杖だ・・・を建物のドアとその周囲にかざし、魔術的トラップの有無を確かめる。

「ありません」

杖をかざしていた人間が、女性らしい高音の声を小さく響かせる、と、リーダーと思しき影が、黒衣の中から漆黒に塗られた長剣を取り出す。

後ろで周囲を見張っていた二人も、それぞれに漆黒に塗られた斧と二本の短剣を手にした。斧を手にした大柄の男が扉の前に立つと、勢いよく得物を振り下ろし、扉を粉々にした。

その強烈な破壊音もまた、背後に控えた女性魔術師の消音魔法サイレントによってかき消されている。完全なる無音の維持は、高等魔術師クラ

スでないと容易ではない。

リーダーと目配せした小柄な影が、大男と入れ替わり、破壊された扉の先へ飛び込んでいく。その動きに隙はなく、それを見るものがいれば、漆黒の毛皮を持つ狼を連想させただろう。残りの3人も、周囲に気を配りながら暗がりの中へと足を踏み入れていく。一番夜目の利く短剣使いを先頭に、一行は家の中を探索していく。

そして・・・。

「またか・・・」

とある一室で、彼らの目に飛び込んできたもの。それは、椅子に腰掛けたまま、首から上を怪物に噛み千切られたような、無残な死体。

その膝の上には、豪華な装飾を施された剣の鞘だけが残されていた・・・。



その日、冒険者ギルドに顔を出した少年、ケイ・トマスの目に飛び込んできたのは、とんでもない美女だった。艶やかな長い黒髪を後ろに縛り、シンプルだが上質そうな漆黒のレザーアーマーを身に着けていて、彼女用にオーダーメイドされたものであろうそれは、その上からさえ、バランスの取れた素晴らしいプロポーションを誇示してやまなかった。

顔良し、姿勢良し、スタイル良し。あ、でも性格はキツそう。

品定めを終えたケイは、知り合いの真似をして、思わずヒューウ、と下品な音を出しそうになる。が、咄嗟にそれをやめたのは、彼女の腰にさげている得物もまた、とんでもないモノだったからだ。

周囲を見ると、たまたまだろうか、その時店内にいた冒険者たちはいずれも初心者ではないらしい。全員その得物の存在に気付いているらしく、やすやすと声をかけようとするものは一人もいなかった。

（いつものいきがっている新人どもがいたら、後片付けが大変だったかもなァ・・・）

女が腰に提げているもの。それは「魔剣」と呼ばれる武器。

魔術と、それを付加したマジックアイテムがモノを言うこの世界で、特別異彩を放つシロモノだ。それは古代に作られし兵器。使用者の魔力を代償に異様なまでの切れ味と、強大な魔術を発動させる。それゆえに所持すること自体に許可が必要で、どの国でも国外への持ち出しを禁じられているほどだ。

適正を持つ者の極端な少なさと、使い続けていないと力が失われる、という短所さえなければ、信頼と実績ある凄腕の騎士や冒険者に貸し出されることもなかっただろう。

国を治めるためだけなら、適正者が比較的多い王族・貴族の適正者だけで事足りるが、他国の脅威に対抗するためには、残念ながらそうもいってられないのが実情だ。よって、彼らは絶対の忠誠と引き換えに、その強大な力を分け与えている。

(ま、つまりはこの綺麗な姉ちゃんも、お上公認の凄腕、ってワケだ・・・)

などと、ケイがブーツとしているうちに、その「色々と」とんでもない美女は、ギルドのカウンターに座る髭オヤジと一言二言言葉を交わすと「ありがとう」と一礼し、出口に向かってきた。自然、そこに突っ立っているケイと向き合うことになる。

「失礼、そこを通して欲しいんだが・・・」

「うおっと、わ、わりい」

咄嗟に一步、横へ飛びのくように避けるケイ少年に、魔剣を携えた美女は軽く微笑むと、手に抱えていた帽子を被ってスイングドアを押し退け・・・ハタと、ケイの方へ向き直った。そこで何を思ったか、ずいと顔を寄せてくる。突然のことに対応できないケイ。

「は?・・・え?」

「その、手に持ってる剣・・・」

「剣?」

「・・・いや。不躰にすまなかった」

美女は何か言いかけたが、それを止めて目を伏せ口を閉じると、今度こそギルドから去っていった。ケイは、しばらく見送ってから、ようやくフウとため息。次の瞬間、背後から羽交い絞めにされる。これも厳つい容姿をした、顔馴染みの冒険者だ。

「おうおう、なんだよケイ。あの美人の姉ちゃんと知り合いか?」

「ちよっ、ゴードン、ギブギブ死ぬって・・・!!」

ギリギリと、太い腕の筋肉で締め付けられるケイ。タップタップ。ガハハ、と笑いながら腕を解いてやるゴードン。またも顔馴染みが近づいてくる。ベテラン冒険者のヘンリーだ。まだ昼間だということにもう酒を飲んでいるのか、顔が赤い。

「生意気だぞケイ、お前みたいなガキが女に欲情するのはまだ早いだろう？」

「どうせアンタには遅すぎだろうさヘンリー。それに、オレはもう16だ」

「ハハハ、立派にガキじゃねえかつ。なあ、ゴードン？」

小さいままだしなあ、と大笑いしながら、ゴードンはバシバシとケイの背中をぶっ叩く。ゴホゴホと咳き込みながら、ケイは考える。

（こんな田舎町に、魔剣使いが何の用だろ・・・？）

とりあえず、ケイは頼まれていた仕事を先に片付けることにした。



「ケルティ様、王都からお客人がお越しでございます」
「あら、どなたかしら」

領主が籠る執政室で、まさにその部屋の主である若年の女領主は、書類の山の向こうから聞こえた執事の言葉に、首を傾げた。長く美しいブロンドが、その動きに合わせて揺れる。

ケルティ・クアタ・ルアシテア。

先の戦乱で、ルアシテア地方の領主である父と母とを同時に失った彼女は、先祖代々の慣例どおりに、この地を治める領主となった。その時、まだわずか14歳。

温厚で義理堅い人間が多い土地柄ということもあり、人徳のあった前領主に恩を感じる人々は、彼女に対する支援を惜しなかった。血筋もあるのだろうか、メキメキと頭角を現した彼女は、領主となって5年、すでに多くの人望を集めている。

一部では、ルアシテアの美姫と持て囃されているほどの美貌を持つケルティの問いに執事は答えようとするが、それを遮るように、いや、実際に片手で遮って、一人の人物が前に出た。

「私だよ、ケルティ」

その人物の声に、執務机から勢い良く立ち上がる女領主。呆然とした様子で呟く。

「・・・もしかして、リタ？」

「正解」



「そう、事件の調査なの・・・」

「すまん」

「いいえ、気にしないで。でも、そう、貴女が来るほどの大事なのね」

屋敷の応接間、ではなくケルティの私室で、先ほど執事が淹れてくれた紅茶を飲みながら、リタからケルティへ、簡単な事情の説明があった。

なにごとにも礼儀正しい老執事は、一礼して別室に下がっている。

「ああ、厄介なことに、魔剣使いがすでに4人も殺されている」
「・・・それで、彼らの持っていた魔剣は？」

自分の簡単な説明に対し、一番重要な部分に反応してみせる旧友に、リタは流石だな、と笑った。恐怖や怒り、戸惑いといった感情に左右されない、冷静な判断能力だ。

「全てもなく、どこかへ、だ。王都は今、戦々恐々としているよ。一部では、他国からの侵略が始まったと喚く者すら出始める始末だよ。まったく・・・」

つつい愚痴ってしまい、リタはこほんと咳払い。

「でだ。魔術省の石頭ども曰く、たった一振りだけ追跡できたのが、この町までだという話だ」

「一振りだけ？ 本当に同一犯なの？」

確かに、同時期に起きた似たような事件が、全く別の犯行である可能性は捨てきれない。しかし、リタは自信たっぷりに頷いた。

「ああ、それは間違いないだろう。毎回、手口は違うがな」
「その根拠は？」

ケルティは、小首をかしげて尋ねた。

「私の勘だ」

「やっぱり。でもそれ、わたし以外には通じないんじゃないかしら」
「フツ・・・。王都の警備強化を理由に、騎士の派遣も断られたよ」

「だから仕方なく貴女一人で出てきたというわけ。おじ様も大変ね。
放たれた矢のような娘をもつなんて」

呆れた、というふうに頭を振るケルティに、若干ばつが悪くなる
リタだったが、気を取り直して言葉を続ける。

「運よくまみえる事がことが出来たとして、相手は魔剣使い殺しの
達人だ。父の子飼いのものは連れてきているし、冒険者ギルドへの
依頼も済ませてきたが・・・」

「解りました。わたしからも心当たりに頼んでみましょう」

リタの言いたいところを察したケルティは、そう言って立ち上がり、
自室においてある父からの形見でもある質素な机の引き出しから
便箋を取り出した。

「頼む」

「などと言って、どうせ貴女のことだから、結局自分でやるつもり
なのでしょう？」

再度、呆れたような表情を向ける幼馴染の領主に、リタはフツと
笑った。

「未来の臣民を危険な目には合わせられんからな」

「はいはい、男前なこと」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2021v/>

RITA

2011年7月26日19時58分発行